

千歌（M）「鬼火が胸の中へ、すうーっと入ってくる。ぬくもりを感じる、暖かい……  
：と同時に、まるで麻酔を打たれたかのよう  
うに、私は……」

S E 海の底へ潜るような、ボコボコ

という泡の音 A

※この S E は最終話で多用するため、以降「泡の音 A」と表記する。

みき「ちか、ちか……」

千歌（M）「え……」

みき「起きた？」

千歌（M）「ここ、どこだろう……立派な、

お屋敷……」

みき「熱が下がってきたみたいね。よかった」

千歌（M）「おかあ、さん……？ 着物姿

の、綺麗な人……」

みき「なにも食べとらんし、お腹すいたやろ

う。(パンパンと手を叩き) 与三よ、与三は  
いるかい？ 御粥もつといで」

千歌(M)「頭が痛い。くらくらする。なに  
か大切なものが、頭の中からごそつと奪わ  
れていく、そんな感じが……」

みき「顔色が悪いねえ。悪い夢でもみとった  
かい？」

千歌(M)「夢？ 夢か……長い夢を、み  
ていたかもしれない。けれどその夢の中の  
出来事が、遠のいていく。すぐそこに在っ  
たものが、あれ……なんだっけ……あ  
れ……？」

S E 襖が開く

与三「奥様、御粥をお持ちしました」

みき「ちかに食べさせておあげ」

与三「お嬢様、失礼します」

千歌「えッ、先輩？」

与三「はあ？」

千歌「あ、ごめんなさい……」

千歌(M)「あれ、私、なにを言ってるんだ

ろう、せんぱいって、え……？」

SE 襖が閉じる

千歌「お母様、さつきの人……？」

みき「えッ、わからない？ 熱でおかしくな  
ったかい？ 与三兵衛やないか。え、本当  
に、わからない？」

千歌「思い出した！ 与三さんだ！」

みき「大丈夫かい？ 今夜はまだ、ゆっくり  
休んどったほうがええわ。さあ目を閉じて、  
眠るときなさい」

千歌（M）「私はちか。小信中島村の庄屋、  
神田伝右衛門の一人娘。大丈夫、心配ない。  
覚えてる。与三さんのこともちやんと思い  
出したし。私は、おかしくない」

SE 朝を告げる、鳥の声

千歌（M）「与三さんのことが、頭から離れ  
なかった。物心ついたときから、私は与三  
さんを兄上のように慕ってきた。けれど『せ